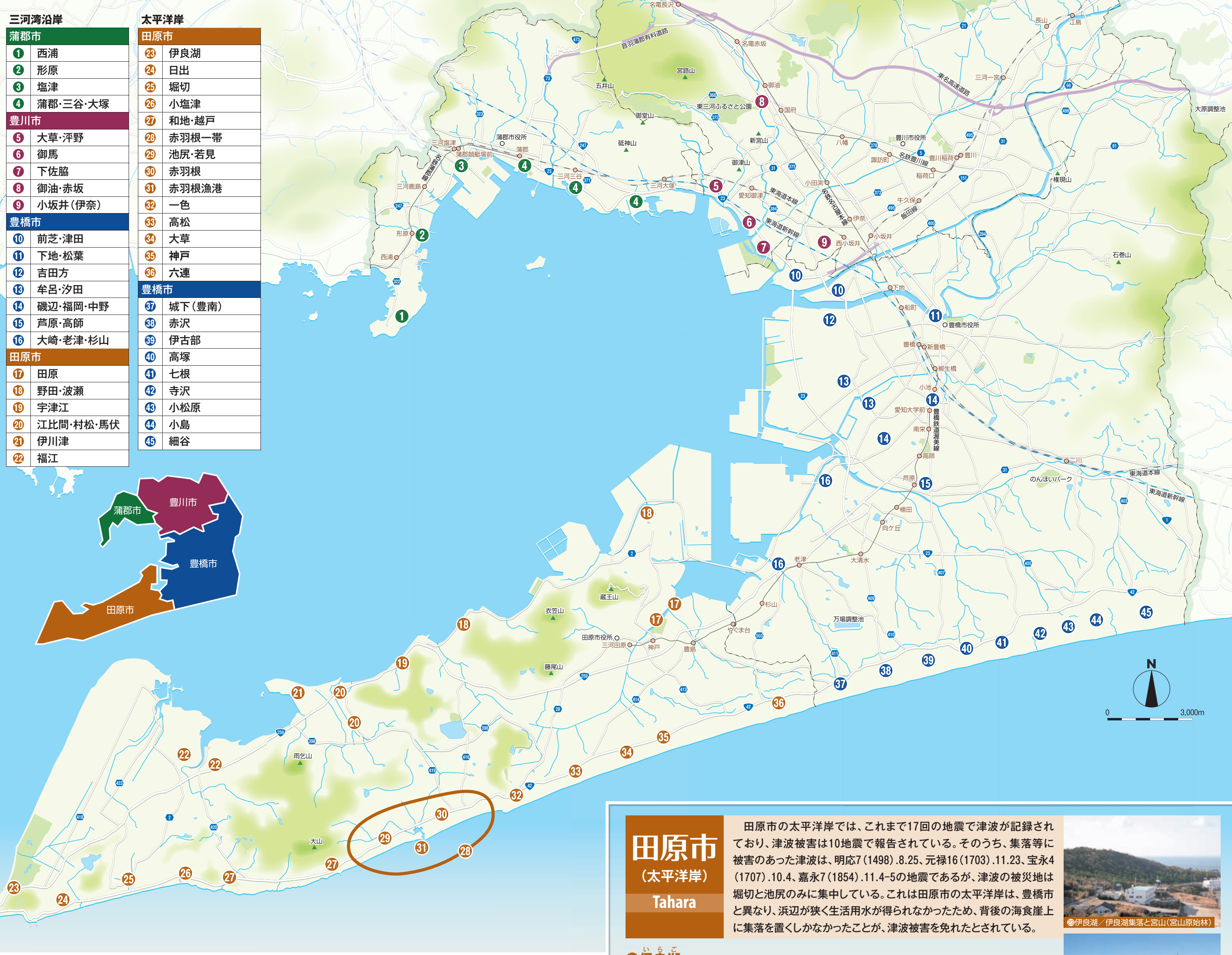




田原市（三河湾沿岸）Tahara

田原市の三河湾沿岸では、嘉保3(1096).11.24から平成23(2011).3.11までの11地震で津波が記録されている。嘉保3(1096).11.24、明応7(1498).8.25、慶長9(1605).12.16、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の5回の地震では3〜5mの津波が発生し、死者、家屋流失または破壊、堤防破壊、田畑浸水等の被害を受けた。

- ⑬田原

田原では、明応7(1498).8.25から平成22(2010).2.27(津波は28日)までの6地震で津波が記録されている。特に、宝永4(1707).10.4の地震は高さ4〜5mの津波が汐川を襲い、汐川の堤や海新田(場所是不明)の堤防が決壊し田畑に被害があったほか、田原御城下など内陸にまで潮が入り込む被害を受けた。嘉永7(1854).11.4-5の地震では高さ3〜4mの津波が汐川を遡上し船倉橋まで高潮が上がリ、海新田は津波で堤が切れ翌年まで海となっていた。海辺では船・漁具が多数流失し、100間(約180m)の浜辺が欠けたとの記録がある。そのほか昭和19(1944).12.17の地震では0.5mの津波が発生し、吉胡地内の低湿地地の一部が海水下面下に沈下した。

⑬田原

田原、吉胡新田付近と汐川

⑬田原

田原、船倉橋付近と汐川

⑮野田・波瀬

野田では、宝永4(1707).10.4の地震で海辺に津波が上がり、網、船、漁具は流失し、浜筋の者は残らずに逃げる。この地震で野田は、田原藩領内の中で最も被害を受けている。波瀬では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3〜4mの津波があったとされるが、津波被害は報告されていない。

⑮野田・波瀬

野田・波瀬、野田海岸沿いの集落

⑮宇津江

宇津江では、江戸時代、地引網で稼き暮らしを立てていたが、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3〜4mの津波があり、地引網場が冠水し、田畑に津波が浸水する被害を受けている。

⑮宇津江

宇津江、宇津江漁港

⑮江比間・村松・馬伏

江比間では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3〜4mの津波が発生し、江比間港(泉泉港)での被害が大きかったほか、江比間の海に近い一本松に鎮座していた津島神社、厳高神社、弁天社、牛頭天王社が津波の被害を受け、前ノ山(南山)に移転している。この地震では、江比間から新堀川等で繋がる内陸の馬伏・村松、江比間の山・向崎集落において、川の堤が破損する被害があり、津波が川を遡上したことを示す文献もみられる。

⑮江比間・村松・馬伏

江比間・村松・馬伏、泉港付近の海岸

⑮宇津江

伊川津、伊川津新田付近と堤防

⑮福江

福江では、宝永4(1707).10.4から昭和35(1960).5.23(津波は24日)までの5地震で津波が記録され、宝永4(1707).10.4では5m近くの津波が発生している。嘉永7(1854).11.4-5の地震では福江の各地で津波被害がでており、陣屋が立地していた品では、津波で漬家屋宅1軒、長屋津2ヶ所を被害を受け、川岸通りの家が浸水し、水道橋や江川の観音橋が破損したほか、内陸の保美まで潮水が浸水している。また延宝元年(1673)に開発された南山新田でも嘉永7(1854).11.4-5の津波で常堰、水門の堤防が破壊され、約56町(約56ha)の新田が一而亡所となった。さらに、福江の中でも漁釣が盛んであった古田では船2隻、浜道具が流失している。

⑮伊川津

伊川津、伊川津新田付近と堤防

⑮福江

福江、穴や川河口付近(右:南山山頂、左:福江の集落)

田原市（太平洋岸）Tahara

田原市の太平洋岸では、これまで17回の地震で津波が記録されており、津波被害は10地震で報告されている。そのうち、集落等に被害のあった津波は、明応7(1498).8.25、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震であるが、津波の被災地は堀切と池尻のみに集中している。これは田原市の太平洋岸は、豊橋市と異なり、浜辺が狭く生活用水が得られなかったため、背後の海食崖上に集落を置けしなかったことが、津波被害を免れたとされている。

⑳伊良湖

伊良湖では、昭和19(1944).12.27と昭和35(1960).5.23(津波は24日)の地震で津波が記録されているが、津波被害はない。江戸時代の伊良湖の集落は、太平洋岸からは宮山(宮山原始林)を挟んだ山の北麓にあってため津波被害を免れたと考えられる。

㉑日出

日出では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波被害が記録されており、住民1名が大嵐川で溺死し、多くの家屋が流失しており、住民は西にある骨山に避難している。また津波により船や漁具も流失し、住民は村の奥に移転するなど不自由な暮らしをしたとされており、津波被害を防ぐために日と堀切の住民は「かいがらば」と呼ぶ特産のいの貝やカキの殻を積み上げて、津波避け堤を築いていた。

㉑堀切

堀切は、これまで4回の地震で5〜8mの津波が記録されている。堀切は海食崖が消失し砂浜と後背湿地の間の標高4.5〜5mに集落があったため、津波が起るたびに大きな被害を受けている。明応7(1498).8.25の津波では人家倒壊、死者があり、宝永4(1707).10.4の津波では集落跡も残さないほどの被害で、常光寺が被災し北方高地に移転している。嘉永7(1854).11.4-5の津波では、西堀切で総家数233の内、流失家数113、死者8人(記録により異なる)、東堀切で総家数68の内、流失家数4の被害を受けている。この津波で砂除堤や土居敷が残らず欠陥れ、田畑も一円に石砂が入り、地引網・船が漂流する被害があり、「西堀切村絵図」では20町37間の砂浜に墨引きし「此所印嘉永七寅年、大津浪ノソツ御引アリ」と津波によって砂浜が広く欠損したことを描いている。また、津波来襲時、西堀切の住民は城山へ、東堀切の住民は御林山(後山、馬越山)に逃れ、その際津波から避難する住民の様子が今でも語られている。

㉑小塩津

小塩津は、嘉永7(1854).11.4-5に波高6〜8mの津波により、浜道具が残らず流失し、船7隻が大破流失し、住民は御林山(後山、馬越山)に逃けている。小塩津はその昔「崎崎(越津)と呼ばれた伊勢へ渡る港町であったが、天長4(827).7.13の大地震で海岸は大陥没し、集落とともに正福寺も日吉神社も移転し、地名を小塩津と改めたものと言い伝えがある。

㉑和地・越戸

和地では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で船11隻が流失・大損し、漁具も流失する被害を受けただけでなく、家屋その他海辺の田畑までも津波で押し流された。特に川尻では3軒が流滅した記録があり、川尻川の河口部の集落では、この津波の影響で現在の国道42号沿いに移転したとの言い伝えがある。越戸でも、嘉永7(1854).11.4-5の津波で船3隻が流失し、漁具が流失する被害を受けている。

㉑赤羽根一帯(若見・池尻・赤羽根)

赤羽根一帯では、元禄16(1703).11.23から平成23(2011).3.11までの11地震で津波が記録されており、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5、平成23(2011).3.11の地震で津波被害を受けている。特に、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の津波では、池尻川河口の低地にある池尻の一部の民家が流失している。

㉑池尻・若見

池尻川の西にある池尻では、海食崖背後の標高5〜20mほどの北斜面上に集落が立地し、精進川下流部の標高5m以下の辺りまで民家が建っていた。そのため、宝永4(1707).10.4の地震では16〜7mの津波が池尻川・精進川を遡上し、赤羽根池尻の川筋の村が大破している。嘉永7(1854).11.4-5の地震でも波高6〜10mの津波が池尻川・精進川を遡上し、池尻の下り集落で床上浸水し、住民は死者も死し、船13隻が大損するなど、漁船・漁具も流出したほか、池尻川河口に近い所に鎮座していた弁天社が津波により流失している。

⑬伊良湖、伊良湖集落と宮山(宮山原始林)

㉑田原、大堀川河口

㉑堀切、西堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

㉑堀切、城山(みづたけ)堀切の集落

㉑小塩津、小塩津の海岸

㉑堀切、堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

㉑堀切、城山(みづたけ)堀切の集落

㉑小塩津、小塩津の海岸

㉑堀切、堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

㉑小塩津、小塩津の海岸

㉑堀切、堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

㉑小塩津、小塩津の海岸

㉑堀切、堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

㉑小塩津、小塩津の海岸

㉑堀切、堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

蒲郡市Gamagori

蒲郡市では、これまで地震による津波が9回記録されている。地区別にみると、西浦、形原、塩津など蒲郡市西側の地区で津波被害が多く、塩津や西浦では建物の流失が記録されている。

㉑西浦

西浦では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で高さ2mの津波が松島を波が打ち越して、5人の家に海水が入り、住民は屋外で小屋を建てて寝たとの記録がある。なお、この地震で松島の大部分の松の木と地蔵菩薩が流失したが、その後地蔵菩薩が拾われ大光院に移されたとの言い伝えが残っている。

㉑形原

形原では、これまで6回の地震で津波が記録されているが、津波被害はない。しかし、「[わすれじの記]によると、昭和20(1945).1.13の地震で、「[下市に津波がきた。]」、「林光寺付近の家の前は海だった。」との住民証言の記録があるように、下市地区に津波が来て家屋が浸水したものとかがわれる。これは、地震の断層が形原を縦断し、断層を境に田形原漁港で1.5m隆起し、下市側で0.7m沈下したことが影響していると思われる。

㉑塩津

塩津では、明応7(1498).8.25の地震で4mの津波が襲い、竹谷町の白山神社が流され現在地に移転している。宝永4(1707).10.4の地震による津波では鹿島の塩田の約3階が潰れ、竹谷の塩田も潮が入り潰れている。嘉永7(1854).11.4-5の地震による津波では、竹谷の太田新田の堤防が決壊し、大剣港の堤防が流れ、拾石陣屋(逸見陣屋)跡地も津波被害を受けている。昭和20(1945).1.13の地震では、津波が60cm発生し塩田に海水が浸水している。

㉑蒲郡・三谷・大塚

蒲郡・三谷・大塚では、宝永4(1707).10.4、昭和20(1945).1.13、平成22(2010).2.27(津波は28日)の地震で津波が記録されているが、被害は記録されていない。昭和20(1945).1.13の地震では1mほどの津波が蒲郡に襲来し、岸壁の上まで水がきたとの報告がある。

㉑西浦・松島

西浦・松島

㉑形原・林光寺付近

形原・林光寺付近

㉑塩津・大橋港(右)と太田新田(高松崎集落)付近(左)

塩津・大橋港(右)と太田新田(高松崎集落)付近(左)

㉑蒲郡・大塚・竹島海岸

蒲郡・大塚・竹島海岸

豊橋市（三河湾沿岸）Toyohashi

豊橋市の三河湾沿岸では、これまで12回の地震で津波が記録されており、そのうち6地震で津波被害が報告されている。地区別にみると、江戸時代より新田開発が行われた前芝、吉田方、牟呂、汐田などの地区で、田畑への津波被害がでている。また、江戸時代に海辺に近かった磯辺(草間)、高師、芦原、老津などの地区でも、集落への津波被害がみられる。

㉑前芝・津田

前芝では、宝永4(1707).10.4、昭和21(1946).12.21、昭和35(1960).5.23(津波は24日)の地震で津波が記録されており、特に宝永4(1707).10.4の津波では毎敷村の塩田が全滅している(その跡地に山内新田が作られた)。また、津田にある匠王寺の薬師如來は、大地震の津波で下五井村へと流れてき、下五井の人々が祀ったとの言い伝えがある。

㉑下地・松葉

下地・松葉では、嘉永7(1854).11.4-5、昭和20(1945).1.13の地震で津波が記録されている。特に嘉永7(1854).11.4-5の地震では津波が豊川を遡上し、水位が3合位(約1.8m)に増水し吉田大橋が損傷(往來の支障を来す程度の損傷ではない)している。

㉑吉田方

吉田方では、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波が記録されている。宝永4(1707).10.4の地震では高須・土倉新田が津波被害を受けている。嘉永7(1854).11.4-5の地震では高須新田で波高3mの津波が発生し、堤防が破壊され大損害となり、青竹新田でも潮が入る被害を受けた。

㉑牟呂・汐田

牟呂では、明応7(1498).8.25に3〜4mの津波があり、牟呂吉田にあった素盞鳴神社が流失し、豊橋駅の西向2kmに移転している。嘉永7(1854).11.4-5の地震では富士新田が破損している(津波の影響かは不明)。汐田では、宝永4(1707).10.4の津波やその前後に発生した高潮等により、松島新田が高須・土倉新田(吉田方)と同様の津波(高潮)被害を受けている。

㉑磯辺・福岡・中野

江戸時代の磯辺は、駒形町・本宮神社より低い所はほとんど海であったとされており、明応7(1498).6.25の地震では大津波が発生し、海辺の家屋を破壊している。宝永4(1707).10.4の地震では津波が海岸の堤防を破壊し、神野新田町の品井潟、駒形町の広島などに浸水している。嘉永7(1854).11.4-5の地震では、津波で草間村の海岸が決壊している。なお磯辺より内陸の福岡や中野では、津波にまつわる地名(小浜)、寺院名(潮音寺)や寺周辺の地名(堤満)の言い伝えがある。

㉑赤羽根

池尻川の東にある赤羽根では、宝永4(1707).10.4の地震による大津波で浜道具が流れ、嘉永7(1854).11.4-5の地震では6〜10mの津波で漁船11隻、漁具が流失した記録がある。集落は標高25mほどの平坦な台地上に立地していたため、津波による集落への被害はあまりないが、嘉永7(1854).11.4-5の地震で現在の若宮八幡社付近が津波被害を受けたほか、池尻川から潮が入り村方の茂川原球場まで潮があがるなど、内陸側まで被害が及んでいる。

㉑赤羽根漁港

池尻川河口部の赤羽根漁港は、平成22(2010).2.28に70cmの津波、平成23(2011).3.11に1.6mの津波が記録されており、特に平成23(2011).3.11の津波では、引き潮で水位が2m半も下がり漁港一部の海底が露呈するほどであった。この津波で2隻の船が転覆し廃船となっている。

㉑一色

一色では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で、大磯が砂浜にある岩に見えてしまう程沖合にまで海が引いたの言い伝えがある。

㉑高松

高松では、宝永4(1707).10.4の地震で、常より5丈(約15m)程高し津波があがり、ほうへの低い所を越え、網、船が残らず流れた。また、八柱神社は旧来「宮沢」にあったが、宝永4(1707).10.4の地震により2年後に比呂古山(現・比子村)へ移転している(津波の被害かは不明)。

㉑大草

大草では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で、船1隻が流失したほか、漁具が流失している。安政2(1855).9.28の地震では、高潮により浜道具が多く流れた。

㉑神戸

神戸では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で、海面が20丁(約22km)位引潮になり、屋等が欠け16・7台(約4m)まで海となるとの大津波が襲い、住民は食物を持って逃れた。安政2(1855).9.28の地震では、谷ノ口で崖下8尺(約2.4m)くらいの津波が打ち付け、船・網が流れた。

㉑六連

六連では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波が記録されており、久美原村では網などの漁具が流失する被害を受けている。

㉑西浦・松島

㉑形原・林光寺付近

㉑塩津・大橋港(右)と太田新田(高松崎集落)付近(左)

㉑蒲郡・大塚・竹島海岸

㉑西浦・松島

㉑形原・林光寺付近

㉑塩津・大橋港(右)と太田新田(高松崎集落)付近(左)

㉑蒲郡・大塚・竹島海岸

豊川市Toyokawa

豊川市では、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5、平成22(2010).2.27(津波は28日)の地震で津波が記録されており、宝永4(1707).10.4の地震では大草・坪野、下佐脇の塩田で津波被害が、嘉永7(1854).11.4-5の地震では御馬、御油、赤坂の集落等で津波被害が報告されている。

㉑大草・坪野

大草・坪野では、宝永4(1707).10.4の地震で津波が記録されており、両地区とも塩田に大損害を受けたほか、大草では堤防が8.5kmも破損し、損害も大きかったとの記録がある。

㉑御馬

御馬では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で「激波ノ為二百五十俵計海面へ引出サル」と津波被害が記録されていることから、当時年貢米が集積されていた御馬港で津波被害があったと思われる。

㉑下佐脇

下佐脇では、宝永4(1707).10.4の地震で津波が発生しており、塩田は全滅し、水田、畑も被害があったと記録されている。

㉑御油・赤坂

御油・赤坂では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波が4〜5m発生し、死傷者や家屋流失などの多大な被害があったと記録されている。ただし、御油・赤坂での津波は音羽川を遡上したものであるが、距離や標高からの規模の津波は困難と記されており、別の文献では御油・赤坂ともに地震そのものの被害は軽かったとの記録もある。

㉑小坂井(伊奈)

小坂井(伊奈)にある東漸寺は、往古前芝村にあり本寺の延命地蔵尊が祀られていたが、津波で地蔵尊が伊奈の地に漂着したため、現在地に堂宇を建てて、地蔵尊を本尊として祀っている。(津波の被害時期は明応元年(1492)以前と天文9年(1540)の2説がある。)平井八幡社は、天文年間(初期(1532頃)の大洪水によって社殿が流失し、豊橋市貫茂の照山の麓に流れていた)の言い伝えがある。

㉑芦原・高師

江戸時代の芦原・高師は、梅田川沿いに高足湊(現・西高師町船渡)があったとされており、明応7(1498).8.25の地震では高さ3mの高波が高師浜を襲っている。嘉永7(1854).11.4-5の地震では大津波が襲来し、家屋数多く数度流失し、道目記地区(大山西)の集落は松井に移転し、浜海道船原(浜道町)の集落の一部も屋へ地敷替えている。

㉑大崎・老津・杉山

老津では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3〜4mの津波が襲い、地震による倒壊家屋が40戸あったと記録されている(津波の影響かは不明)。大崎では、昭和20(1945).1.13の地震で津波(最大全振幅52cm)が観測されているが、被害は記録されていない。杉山は津波による被害の記録はない。

㉑城下(豊南)

城下(豊南)では、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震で6〜7mの津波が発生し、漁具が流失する被害を受けているが、集落は宝永4年(1707)以前に海食崖下の上の台地に移転していたため、集落への津波被害の記録はない。ただし八幡神社の文献では、浜に残っていた一部の集落がこの地震により移転したと伝えられており、同神社に祀られている八王子大明神はその集落移転の時に改名したとの言い伝えがある。

㉑赤沢

赤沢では、宝永4(1707).10.4の地震で太平洋に注ぐ開折谷の小河川に6〜7mの津波が浸し、川筋の標高数m付近にあった村落が被害を受けている。また吉祥院は、宝永4(1707).10.4の地震で寺山が崩れ、現在地に移転し、それにとない集落も移転している。

㉑伊古部

伊古部では、宝永4(1707).10.4の地震で船・漁具が流失し、当時大塚・郷本・枇杷ヶ谷の海食崖の下にあった集落も被災し、段丘崖上に移転している。なお法蔵寺の原順願図は、村の移転によって置き去りにされていたものを記ったとの言い伝えがある。また嘉永7(1854).11.4-5の津波では、船3隻が流失し、居宅も大破するなど集落到甚大な被害を与えている。

㉑高塚

高塚では、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震・余震による津波が記録されているが、すべて漁船や漁具類の流失被害である。高塚の集落は貞享3年(1686)の地震で浜尻敷から台地上へ移転したため、宝永4(1707).10.4の地震による津波被害はみられないが、この地震で高塚村の24軒(40%)が転び、菟原神社の戸との宮様も海へ落ちる被害がでている。

㉑七根

七根では、竜泉寺が宝永4(1707).10.4の地震で津波の被害を受け移転している。また御厨神社の文献では当時、同神社が立地していた「河内の地」の集落が宝永(1707).10.4の大津波で安全な北方高地に移転し、氏神(御厨神社)も遷宮したと伝えられている。なお御厨神社では嘉永7(1854).11.4-5の津波を描いた絵馬が残っており、「大津波来て　村々の網舟　悉く漂流されし目に掛る物なし」と津波の様子を伝えている。

㉑寺沢

寺沢では、宝永4(1707).10.4の地震で、海辺に立地していた東漸寺が津波被害を受け、現在の地に移転している。なお東漸寺に祀られている行者塔は、当時、海岸の墓地に建っていたが、大津波の被害を受けてもこの塔だけは残り、現在に至っている。

㉑小松原

小松原では、宝永4(1707).10.4の地震で、海岸近くに立っていた東観音寺が津波で大きな被害を受け、正徳3年(1713)に現在地へ移転している。同様に、海辺の精沢村に奉祀であった小松原蓮華社も、大津波で現在地に移転している。東観音寺には小松原海岸の榊木林の中に跡地を示す「開山行基菩薩」と刻まれた石や、江戸時代前期の「東観音寺古地内図」、「小松原村絵図」が残されており、当時太平洋の海岸沿いに集落があったことを現在まで伝えている。

㉑小島

小島では、宝永4(1707).10.4の地震で、大応寺が津波被害を受けており、海岸に立地していた小島神社も地震被害(津波は不明)を受けている。両寺ともこの地震・津波を契機に移転している。

㉑細谷

細谷では、宝永